

Ⅱ. 2014 年度の活動実績

1 地域共同研究・地域交流活動の主な成果

(1) 長崎県・雲仙市との連携による E キャンレッジ推進事業

2007 年 4 月 27 日、長崎大学環境科学部、長崎県環境部及び雲仙市は、相互の連携協力を推進し、持続可能な開発のための地域活動を活性化するとともに、地域活動のリーダー育成のための実践学習を展開していくことで合意した。その一連の活動を「雲仙 E キャンレッジプログラム」と呼び、それを推進していくための協定書を締結した。

「E キャンレッジ」とは、「エコキャンパス+エコビレッジ」からの造語である。雲仙市地域で長崎大学、長崎県そして雲仙市の三者は協力連携しながら、エコビレッジそしてエコキャンパスを目指して以下のような活動を推進していく。長期的にはこの地域が「持続可能な社会づくりのための教育拠点」となることを目指している。

この協定に関連するものとして、2014 年度は以下の事業を実施した。下記②については、Ⅱの 2 で詳述する。

① 大学高度化推進経費「島原半島ジオカフェ 2014」事業

「雲仙 E キャンレッジ」により、これまで環境科学部が雲仙市等で実施してきた市民公開講座や、調査研究の機会をとおして長崎県内（特に島原地区）の住民より島原半島世界ジオパークにおける、自然エネルギーや観光資源を活かしたまちづくり、豊かな湧水資源などについて最新の知識を得たいというニーズが広がっている。

本事業は、環境科学部環境教育研究マネジメントセンターが主体となり、住民のニーズが高い島原半島ジオパーク地域に関する「知」を広く発信する市民公開講座を島原地区及び本学で 5 回開催した。開催場所については、第 1,5 回を本学、第 2,3 回を雲仙岳災害記念館、第 4 回を雲仙お山の情報館別館とした(写真Ⅱ-1～4)。

- ・第 1 回 10 月 6 日 「サバを増やし、鹿を減らし、風車を回す-自然とうまくつき合うための生態系アプローチ-」
(横浜国立大学教授 松田浩之氏、本学部教授 杉村 乾)
- ・第 2 回 11 月 21 日 「ジオパークとダーク・ツーリズム-“祈る”旅と災害からの復興-」
(追手門学院大学准教授 井出 明氏、本学部准教授 黒田 暁)
- ・第 3 回 11 月 25 日 「半島・活火山の自然と水環境-自然の脅威・恩恵と人びとの暮らし-」
(法政大学准教授 小寺浩二氏、本学部教授 中川 啓)
- ・第 4 回 12 月 6 日 「古写真と絵葉書でめぐる雲仙と島原半島-明治・大正・昭和初期の国際リゾートを訪ねて-」
(長崎居留地研究会 中島恭子氏、本学部准教授 馬越孝道)
- ・第 5 回 1 月 5 日 「共感が生み出す地域づくりの最前線-中山間地の現場から学ぶ-」
(法政大学准教授 図司直也氏、本学部准教授 黒田 暁)

雲仙市、島原市、長崎県の関係者や市民の参加もあり、また、環境科学部フィールドワークスクールを受講した本学部学生へ複数回の参加を義務づけることや、講義の一環として開催した回もあり、多くの参加者を確保することができた。今後も地元のニーズを把握し、環境科学部の「知」を

地域に提供していきたいと考えている。



写真Ⅱ-1 井出明氏による講演



写真Ⅱ-2 小寺浩二氏による講演



写真Ⅱ-3 中島恭子氏による講演



写真Ⅱ-4 関司直也氏による講演

② 大学高度化推進経費「質の高いフィールドワーク・スキルを備えた環境スペシャリストの育成」事業(→Ⅱの2の(5)へ)

(2) 自治体等が設置する審議会や委員会委員等への就任

センターの役割の1つに、自治体等が設置する審議会や委員会などの委員、アドバイザー派遣の支援をおこなう活動がある。センター運営委員の教員は、2014年度はおもに次のような審議会や委員会などの委員に就き、学術的知見の還元に努めた。

・中川 啓 教授

長崎県土地収用事業認定審議会(会長)

長崎市上下水道事業運営懇話会(会長)

雲仙市環境保全審議会(会長)

島原半島窒素負荷低減対策会議委員

西海市公害対策審議会委員

長崎県環境アドバイザー

長崎県高大連携推進委員

・深見 聡 准教授

長崎県庁環境マネジメントシステム外部評価委員会(副会長)

長崎港ターミナルビル活性化検討協議会委員

長崎県環境アドバイザー

長崎県高大連携推進委員

・吉田 謙太郎 教授

環境省中央環境審議会自然環境部会自然公園小委員会専門委員

長崎県ながさき森林環境基金管理運営委員会(委員長)

長崎市中央卸売市場開設運営協議会(会長)

・馬越 孝道 准教授

長崎県環境影響評価審査会委員

・渡辺 貴史 准教授

長崎県環境審議会委員

長崎県美しい景観形成審議会委員

長崎県美しい景観形成アドバイザー

「長崎市中央部・臨海地域」都市再生委員会委員

長崎県屋外広告物審議会(会長)

長崎市屋外広告物審議会(会長)

長崎市建築審査会(会長)

長崎市外海の石積集落景観整備活用委員会委員

旧グラバー住宅等保存活用計画策定委員会委員

雲仙市緑の基本計画策定委員会(委員長)

長与町コンパクトシティ構想推進委員会委員

深堀地区景観まちづくりガイドライン策定支援業務

2 学生への教育活動の主な成果

(1) 新入生合宿研修

2014年4月4日～5日、新1年生を対象として実施した。環境科学部正面玄関前に集合の後、バスで千々石展望台および雲仙市小浜温泉のバイナリー発電所へ向かった。夕方には宿泊先の雲仙温泉に位置する湯元ホテルに到着。深見聡准教授による「雲仙 E キャンレッジプログラム」についての紹介、大野希一氏(理学博士、島原半島ジオパーク推進連絡協議会事務局)による島原半島ジオパークに関する講話があった(写真Ⅱ-5)。また、新2,3年生が主催するグループディスカッションもあり、学生たちは環境科学部での学生生活がいよいよ始まることを実感しているようだった。

2日目は、南島原市深江町にある旧大野木場小学校被災校舎などの見学をおこない(写真Ⅱ-6)、帰路についた。

新入生合宿研修は、環境科学部創設以来の恒例行事として実施しており、2008年度以降は雲仙で継続しておこなっている。センターとしては E キャンレッジ構想をはじめ、フィールドで学ぶことの楽しさを感じてもらい第一歩となれるよう内容の充実を図っていきたいと考えている。



写真Ⅱ-5 深見准教授による講話



写真Ⅱ-6 旧大野木場小学校被災校舎の見学

(2) 環境科学特別講義 B, C, D

① 環境科学特別講義 B

開講期と単位数：2014年度後期・1単位

科目分類：専門科目(環境政策コース・環境保全設計コース共通)

担当：吉田謙太郎教授

ねらい：環境問題の諸分野について、毎年テーマを絞って講義する。それらをとおして、環境科学の普遍性と多様性を知り、具体的な活動の場面で求められるアプローチ手法を学ぶ。
なお、本科目は、雲仙市・長崎県環境部・本学環境科学部の三者連携協定「雲仙 E キャンレッジプログラム」の一環として開講するものである。

到達目標：・環境保全の理念と実際について理解する。

- ・条件不利地域における観光の事例をとおして、自然環境と人間の共生のあり方に対する具体的な提言能力を涵養する。

授業内容：第1回(12月15日) イントロダクション(吉田(謙))

第2回(12月22日) 持続的な生態系の保全と利用ー日本と世界の各地の事例から(杉村)

- 第3回(1月5日) 関司直也先生(法政大学)講演「共感が生み出す地域づくりの最前線」
(黒田)
- 第4回(1月19日) フランス産業革命によってもたらされた環境問題とオスマンの都市計画(五島)
- 第5回(1月26日) 中山間地域と国土・地域政策(片山)
- 第6回(1月27日) 郊外住宅地の歴史と未来(渡辺)
- 第7回(2月2日) 条件不利地域と地域づくり：地域創生と企業の役割(藤井)
- 第8回(2月9日) まとめ／期末試験

② 環境科学特別講義 C

開講期と単位数：2014 年度前期・1 単位

科目分類：専門科目(環境政策コース・環境保全設計コース共通)

担当：深見 聡 准教授

ねらい：「環境」に係る諸分野において学外で活躍している方々を講師に迎え、環境科学の普遍性と多様性を知り、具体的な活動の場面で求められるアプローチ手法を学ぶ。なお、本科目は「環境科学特別講義D」および「地域技術論」の2科目と連動している。とくに本科目の受講生は、環境科学特別講義Dも連続して受講することをお勧めする。

到達目標：環境問題への具体的な取り組みを聞き理解することをとおして、単にそれらを事例や知識にとどめるのではなく、環境科学のもつ普遍性と多様性を知る契機となるようにする。そして、「環境」を主体的にとらえ、みずからの考えをもてるようになることを目標とする。

- 授業内容：第1回(4月7日) オリエンテーション
- 第2回(4月14日) さいかい元気村&させぼ時旅の挑戦
北島 淳朗 氏(地域づくりファシリテーター)
- 第3回(4月21日) 環境問題をフィールドで考える(1)
- 第4回(4月28日) 地域政策の立案の現場から
松島 完 氏(長崎県議会議員)
- 第5回(5月12日) 環境問題をフィールドで考える(2)
- 第6回(5月19日) 島原半島ジオパークの取り組み
江越 美香 氏(島原市役所主査)
- 第7回(5月26日) 雲仙Eキャンレッジプログラムとは
- 第8回(6月10日) まとめ

③ 環境科学特別講義 D

開講期と単位数：2014 年度前期・1 単位

科目分類：専門科目(環境政策コース・環境保全設計コース共通)

担当：深見 聡 准教授

ねらい：「環境」に係る諸分野において学外で活躍している方々を講師に迎え、環境の普遍性と多様性を知り、具体的な活動の場面で求められるアプローチ手法を学ぶ。なお、本科目は「環境科学特別講義C」および「地域技術論」の2科目と連動している。とくに本科目の受

講生は、環境科学特別講義Cと連続して受講することをお勧めする。

到達目標：環境問題への具体的な取り組みを聞き理解することをとおして、単にそれらを事例や知識にとどめるのではなく、環境科学のもつ普遍性と多様性を知る契機となるようにする。そして、「環境」を主体的にとらえみずからの考えをもてるようになることを目的とする。

授業内容：今年度は、「世界遺産、国際環境協力、災害復興と観光」をキーワードとして取り上げていく。

第1回(6月9日) オリエンテーション

第2回(6月16日) 高校生が主役の環境保全活動

井上 貴司氏(山陽女子中学・高等学校教諭)

第3回(6月23日) 環境問題を現場で考える(1)

第4回(6月30日) 国際協力活動の現場から(1)

白鳥 佐紀子氏(JICA研究所研究員)

第5回(7月7日) 国際協力活動の現場から(2)

小川 領一氏(有限会社ラーバンデザインズ取締役)

第6回(7月14日) 環境問題を現場で考える(2)

第7回(7月28日) 災害復興と観光

井出 明氏(追手門学院大学経営学部准教授)

第8回(8月4日) まとめ

(3) 地域技術論

開講期と単位数：2014 年度後期・2 単位

科目分類：専門科目(環境政策コース)

担当：中川 啓 教授

ねらい：ここでいう地域技術とは、端的にいうならば「持続可能な地域づくりなどのテーマで、フィールドにおける適正な調査や実践活動に必要な技術」をさす。たとえば、フィールドワーク(実地調査または巡検ともいう)の技法を机上で習得したとしても、住民や行政などの協力や信頼関係をすぐに築けるとは限らない。技法にとどまらないマナーや、事前の準備・事後のフォローなどが不可欠である。そこで本科目は、副題を「地域事情研修」とし、フィールドでものごとを考えることの重要性を、いくつかの調査事例や実際のフィールドワークをとおして理解することをねらいとする。

到達目標：・フィールドにおける適正な調査や実践活動に必要な技術とはどのようなものか説明できる。

・フィールドワークの対象について、表層と深層といった多角的なとらえ方の重要性を理解することを目標とする。

授業内容：今年度は、島原半島ジオカフェ2014および環境科学部フィールドワークスクールへの参加をとおして、上記のねらいを獲得していくことを目的としておこなった。

(4) 課外科目「環境科学部フィールドスクール」

本事業は、2012 年度学部長裁量経費(教育・研究プロジェクト経費)「島原半島ジオパークにおけ

る大学生対象の環境教育プログラム構築に関する実証的研究」(代表者：深見聡准教授、共同担当者：吉田謙太郎教授、馬越孝道准教授)による成果をもとに、環境科学特別講義 C の講義で扱う「島原半島ジオパーク」などを対象として、大学生向け環境教育プログラム確立の道筋を、学生参画のワークショップ実践等を通して示し、地域の自然・文化を活かした総合的な活性化策への展望を描くことを目的としておこなった。

本課外科目は、これまでのフィールド教育の経験を活かし、2009 年度より実施している E キャンレッジ「中山間地学生研修プログラム」の内容をより充実強化させるために、ジオパークなど「大地の遺産」を活用した新たな学部フィールド教育のコンテンツを学生参画のワークショップの実践を通して開発し、2014 年度以降の新カリキュラムに寄与するプログラムの指針となることを最大の狙いとする。

2014 年度は全 3 回実施した。

① 長崎市大中尾棚田での活動

フィールドスクールの第 1 回(6 月 8 日)、第 3 回(10 月 4 日)として実施。それぞれ約 20 名、約 10 名の学生が参加した。この活動は、棚田百選の大中尾棚田を管理する大中尾棚田保全組合、長崎市農業振興課と連携のもとで企画実施し、長崎県立大学、長崎総合科学大学、長崎女子短期大学と合同で田植え、稲刈り作業を体験した。

参加者の多くは 1,2 年生であり、環境科学特別講義 C で扱った、「環境問題をフィールドで考える」契機になったと考えている。とくに、棚田の多面的機能について、実践的視点から学ぶことができた(写真Ⅱ-7)。



写真Ⅱ-7 大中尾棚田での田植えの様子

一方で、この活動は、保全組合が主導する大中尾棚田トラスト事業の一環として実施していることから、これらの取り組みに至った経緯や現状、今後の課題や展望を含めた学習時間の確保を図り、より高い教育的効果につなげていく点が次年度も引き続き課題として把握された。

② 雲仙市田代原地区での活動

フィールドスクールの第 2 回(7 月 5 日)として実施し、5 名の学生が参加した。九州の建設コンサルタントのメンバーが中心となって活動する「九州郷づくり共助ネットワーク研究会」と、田代原地区(通称：奥雲仙)で環境保全活動に取り組む NPO 法人奥雲仙の自然を守る会と連携して、国立公園区域内でのミヤマキリシマ保全活動やグリーンツーリズムの取り組みに関して座学や意見交換をおこった。

NPO 法人代表の中田妙子氏のあいさつに続き、九州の郷づくり共助ネットワーク研究会による自然公園制度の概要と田代原地区の位置づけの紹介があった。そのなかで、田代原地区は、自然公園の第 2 種特別区域にあたり、農林業等との調整をおこなったうえで環境保全を進めるといった現状を知ることができた。

つぎに、実際に自然体験のフィールドとして利用が期待されている「遊々の森」で下草刈りをおこなった(写真Ⅱ-8, 9)。



写真Ⅱ-8 共助研との意見交換



写真Ⅱ-9 遊々の森での下草刈り

(5) 大学高度化推進経費「質の高いフィールドワーク・スキルを備えた環境スペシャリストの育成」事業

フィールドワークをおこなう場所を、自然環境に恵まれた世界ジオパーク認定地である島原半島にしぼり、課外科目「環境科学部フィールドワークスクール」として全3回実施した。

① 第1回 11月15日(土)

26名が参加した。島原半島のほぼ中央に位置する雲仙市田代原地区において、午前中は、ミヤマキリシマ保全活動として除草・伐採作業に、九州郷づくり共助ネットワークの若手技術者研修者の方々、地域住民の方々と従事した(写真Ⅱ-10)。その作業をおこなった場所「遊々の森」で昼食ののち、午後は地域支援のあり方討論会として、以下の3つのテーマについて議論した。

- ・ミヤマキリシマ等の固有の自然環境を守るための牧畜業といった地域振興策
- ・固有の森林環境(遊々の森)を環境教育の場とするための方策について
- ・奥雲仙により多くの人々が訪れるための観光連携の方策について

本学部の学生は、若手技術者研修会参加者が前日から議論しその結果をまとめたものを聴講し、感想やみずからの考えを述べていた。

田代原地区においては、放牧されていた牛馬が別の場所に移動したことなどにより草地環境が維持されなくなったため、ミヤマキリシマの生息域が減少していることを学び、実際にその保全活動に参加することと、地域支援のあり方についての具体的な3つのテーマについての討論会に参加することによって、地域で起こっている問題とその解決策について検討する方策について学ぶことが



写真Ⅱ-10 遊々の森での活動

できた。とくに、PCM(プロジェクト・サイクル・マネジメント)手法を応用した方法により討論がおこなわれていた。このような具体的手法は、問題解決を検討するうえで参考になると思われる。また、解決案の事例のなかでは、クラウドファンドの利用などさまざまなアイデアが紹介されるなど、学生の興味を刺激したのではないと思われる。また、環境コンサルタントに従事されている方々と交流することにより、学生自身の将来の進路を考える機会も得られるなどの副次的な収穫もあった。

② 第2回 12月14日(日)

21名が参加した。大野希一氏(島原半島ジオパーク事務局次長)の協力のもと、雲仙火山の平成噴火と国内最大規模の火山災害である島原大変の災害遺構をめぐり、噴火がもたらす災害と火山の恵みについて学ぶことを目的とした。訪ねた場所は、平成新山ネイチャーセンターの火砕流堆積物の露頭、土石流被害家屋保存公園、雲仙岳災害記念館、仁田団地第一公園、白土湖、島原大変前の旧海岸線、浜の川湧水である(写真Ⅱ-11)。



写真Ⅱ-11 火砕流堆積物露頭の見学

火山の災害と恵みの両面を学ぶ内容となっており、参加者は繰り返される噴火災害とそこに暮らす人々とのかかわりについて詳しく理解することができた。

③ 第3回 1月11日(日)

21名が参加した。島原半島の各地をめぐりながら、自然環境が織りなすさまざまな景観を観察するとともに、そうした景観がどのような地形・地層から成り立っているのかについて、また、地形・地層の形成に島原半島の歴史や人々の生活がどのようにかかわり、影響しているのかということを感じて学ぶことを目的とした。訪ねた場所は、千々石展望台(島原半島の地形を概観する)、棚畑展望台(段々畑の景観がどのように形成されていったのか、土壌を観察する)、花房展望所(早崎半島の地形を観察)、原城跡(先史時代の噴火が形成した地層と歴史的事件の関係)、両子岩(奇岩の存在と意味)、小浜温泉(湧水と歴史のまち歩き)であった(写真Ⅱ-12, 13)。

今回は、島原半島の地形・地層がどのように形成されてきたかについてマクロな視点でそれらを眺めることと、そこに人々の営みの歴史がどのような影響を及ぼしているのかというミクロな視点で観ることの双方が意識された行程であった。とくに、行程の初めと終わりに千々石展望台から島原半島を望んだが、その地形・地層の景観がみずからの視点次第で違った様相に見えることを学生たちが体感できたものと思われる。

2014 年度のフィールドワークスクールの実施により、地域環境をフィールド教育に活かす視点とその重要性が認識され、フィールドワーク・スキルの実践的ノウハウが蓄積された。環境科学部における今後のフィールドワーク関連科目実施の教材とする。また、具体的な地域課題の発見と解決能力を養成する場を開拓し、学生へ提供していきたい。そのような場を、環境科学部の新カリキュラムにおける「環境フィールド演習Ⅱ」「地域環境実習」などにおける対象地として活用していきたい。



写真Ⅱ-12 原城跡の見学



写真Ⅱ-13 小浜温泉と湧水の解説

3 情報発信の主な成果

(1) ホームページの運営

2008 年 11 月に、環境教育研究マネジメントセンターのホームページを開設した。イベント情報や、教員スタッフ紹介、リンク集などの項目を置き、おもに年報、ニューズレターの既刊行(第 14 号まで)やイベント開催報告の内容を更新している。

<http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/ermachp/>

今後も、同類の地域活動をおこなうさまざまな団体との情報交換の場として、内容の充実を図っていきたい。